

マルキ通信

平成元年 2月

創刊号

関西サークル スキークラブ

発刊に寄せて

会長 島田三千男

街中でも雪のちらつきが見られるようになり、やっと本格的なスキーシーズンがきたなあ
と実感できるようになりました。

賑やかな新春ツアーも無事に終わり、楽しい思い出を綴った文章が寄せられて発刊される
ことになり、大変嬉しく思っています。

関西 Knight Ski Club が赤井先生、若山氏らによって創設されて20有余年を経過しよ
うとしています。本クラブは創設時からの関係で奈良県スキー連盟に所属しておりますが、
前会長の赤井先生が勇退なさってから指導者の関係からか、どうも大阪の人々、それも関西
大学関係者が中心になってきました。広く門戸は開放しているつもりですからいろんな方
面の人々が多数会員になって下さればと思っています。

現在クラブ員28名、うち指導員2名、準指導員9名（この外に仕事の関係で資格を返上
された人が3名あります。）と所属連盟の中でも有数の地位を固めております。唯、残念
ながら指導陣が高齢化してまいりましたので、若い人達の頑張りを期待し、クラブの中心的
存在になって欲しいと思います。

私の経験では、スキーとゴルフは始めたら止められません。自然の中でからだを動かす
爽快さは都会生活者の何よりの魅力です。仲間をつくって思い切り自然の中をのたうちま
わってみませんか。

” 89 正月スキー報告



- ◇ 日 程 1月2日～1月7日（5泊6日）
- ◇ スキ ー 場 野沢温泉スキー場
- ◇ 参 加 者 総員63名（男子33名、女子30名）
- ◇ 会員参加者 川島(鮎)、永広(鮎)、谷下、武智、三木、永広(賢)、川島(嗣)、
勝宮、橋爪、野木、大沢、谷口、

少しだけ気掛かりだった積雪と、新年に降った雪でコンディション上々。

例年になく多数の参加者に、貸切りバスの外に定期直行バスを利用。 宿舎も3ヶ所に分
宿。 平均年令25才という今迄になく若い年齢層の参加となった。

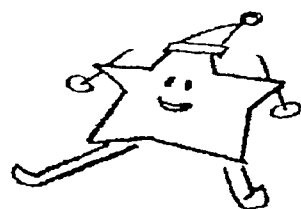
案じていた分宿は、逆に宿同志の仲間意識を高めることとなり、アフタースキーが盛り上
がったと聞く。 1級合格者2名、2級合格者2名と、バッヂテストでは厳しいものがあつ
たが、それぞれの人に新たな目標が生まれそうだ。 怪我などのトラブルがなく、まずは成
功裡にて終了。

参加者から感想文が寄せられましたので、次ページで紹介します。

『 喜劇役者たち 』

法兼 仁 (セクシ6、特別)

「風呂、行こ！」 まだ6時であるが、こうして今日も喜劇が始まる。話し手、聞き手、笑い役、合いの手役、とぼけ役、一人一人が役を演ずる。何も主役は2枚目出といった風ではなく、配役も場面によって変わっていく。さらに後者の関係が高校や大学の師弟であるので、堅いイメージがあるが、なぜか喜劇になってしまうそういう関係なのである。さらにこの劇を喜劇とするために「スキー」が一役演じるのである。この喜劇は人間性あふれ、絶えず笑いがあり、毎年後者の期待を裏切らないのである。そういった魅力が、また参加しようという気持ちを起こさせるのであろう。



来年もまた、喜劇の役者として参加し、喜劇を演じようと今から思うのである。

『 お礼に代えて 』

井上久子 (セクシ24、2班)

好運にも春スキーかと思わせる天候、最高の雪質に恵まれて行なわれた野沢スキー。講習中の先生の厳しい眼…辛かったなあ。グループ毎の語らい、ゲーム…楽しく愉快だった今回2度目の参加。

講習での技術向上プラス検定への道が与えられており、年齢差を超越した何かが周囲に位置づかせているように感じる。多少の筋肉痛と不満もいつの間にか消去され、みんなあたたかな気持ちに包んでくれるツアーであった。

「また参加したいなあ」とメッセージしつつ、スタッフの方々のご労苦に深謝！

『 野沢にて 』

田中麻紀子 (セクシ29、3班)



スキーを初めて4年目にして級をとろうと試みました。私に級がとれるだろうか、みなさんとうまくやっつけられるのだろうか、とても不安でした。

しかし行きとどいた指導、心暖かいみなさまのおかげで、とても楽しい旅となりました。またこのKサークルに参加させていただけることを心から望んでいます。本当にありがとうございました。

『 有意義な旅 』

林 一郎 (セクシ30、2班)

今回のスキーツアーにおいて学んだ事は、数えきれない。スキーの技術面はしかり、団体生活の面でもとても勉強になったと思う。武智先生にスキーを学んだ2班の人達は、みんな優しくて、おもしろくていい人達ばかりだった。武智先生も心から信頼のおける方で、おかげで3日間の講習において、相当上手に滑れるようになったと思う。宿舎内でも同じ部屋になった人達とすぐ仲良くなり、まるで前々からの知り合いのようだった。ぼくにとってこの5泊6日の旅行は、冬休み最後の有意義なものだった。

又機会があったら、是非参加したいと思う。

Kサークルに参加するのも今年で7年目を迎え、なんとか1級に合格させていただきました。2級を取得してから3年間、毎年2回の検定を受け、回数も何度だったかもわからないくらいです。・・・中略・・・

それだけに喜びもひとしおではないかと思われるかも知れませんが、それ程の感激もなく、淡々として合格証をいただきました。なぜなのでしょう。それは検定を数多く受けたことで、自分自身のスキークの能力がある程度把握できるようになったとか、不合格と同時に各種目の得点が表示され、毎回それによって自分の力不足を感じ、弱い種目もわかっており、目標もある程度定まっていたからです。

しかし、検定もさることながら、それ以上に毎年参加してきたのは、いろんな人達との触れ合いが何物にもかえがたいものだと思います。年2回のKサークルスキーを大切に、積極的に参加していきたいと思っています。



難関突破!!

『 新春スキー 』

谷口晶子 (セッケン26、3種)

今回はじめてKサークルに参加させていただきました。最初スキーの講習とは硬い雰囲気かなと思っていたのですが、実際は全然そんなことはなく、和らかな雰囲気の中で、大変丁寧に教えていただけただけを本当に嬉しく思っています。夜も抽選会や宴会で、いろいろな人と話をすることができてとても楽しかったです。

今後の春も是非参加させていただきたいです。

『 出合い 』

辻本朋子 (セッケン27、3種)



今回初めて参加させていただきました。検定を受けるのも初めてで、不安な気持一杯でゲレンデへ行きましたが、川島ジュニア先生の御指導のおかげで3級を合格させていただきました。

今回の旅行でスキー技術の上達はもちろんですが、先生方をはじめとして、とても素敵な人達に出会えた事も私の大きな収穫です。

私にとって意義深いスキー旅行になりました。

『 関西Kサークルスキーツアーに参加して 』

山口吉雄 (セッケン57、4種)

川島先生からスキーツアーの誘いを受け大変に喜んでいました。なぜかと申しますと、私の年になりますとスキーをする人がなく、同好者をこの数年来毎年捜さねばならず困ったからです。加えて講習を主にされると知って、戦前の中学、高校、大学の約5年間の自己流のスキー技術に40年間の空白を埋め、少しでも最近の用具に適した合理的な技術を身につけたく思ったからです。

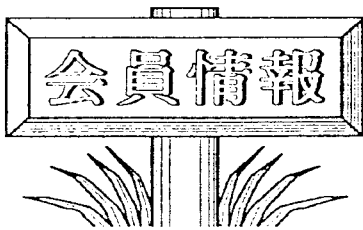
幸に講師が谷下先生でその点では問題はなかったのですが、御本人の身体の方が頭と違って言う事をきかず、誠に残念ながらテストを受けず、フリータイムの時に修正に努力し、良いフォームではないが、人並みに滑れるように向上したと、自己満足ができるようになりました。

今後共、身体の許す限り参加する心算でありますので、よろしく御指導賜りたく存じます。

『やはりスキーは楽し』

自分に挑戦のつもりで、久しぶりに少年のように胸を弾ませ受験してみた。受験者の立場になり色々再体験した。スタートを待つ緊張感が素晴らしい。検定では、それぞれを考え表現したつもりだが、結果の違いに驚いた、自信種目が駄目でダメ種目が高い得点である。ダメ種目は慎重に考え演出し、自信種目は割合に気軽にやった。気持ち良く滑れば上手くいっていると思いき勝ちであったり、又種目の表現意識の違いもあった。立場が逆の時、その度胸に驚く事がある。その技術で、そのスピードで、よくこの急斜面をと……………しかしスキーは気力である。充実した気力には恐怖感は少ない。平素は避けて通るアイスバーンのコブも遙かにスピードは出せる。気力の無い平素ではたちまち暴走である。受験は此等の素晴らしい緊張感と気力を与えてくれる。だがテストに力を出し切るのは難しい。

のんびりと滑るのも、脱ゲレンデの自然の散策も楽しい、しかし時には厳しい条件の中で自分にチャレンジするのも又楽しい。(T. K)



◎ 新入会員です。

(63年度総会時に2名の紹介がありました。)

☞ 谷口 彰 (20才) 学生

☞ 但尾哲哉 (28才) 教員

◎ おめでとうございます。(以下の方がそれぞれに合格されました。)

☞ 準指導員合格者(昭和63年2月) : 川島秀司、渡辺直之

☞ テクニカルプライズ合格者(平成元年1月) : 川島徹也、川島秀司

☞ 級別テスト1級合格者(昭和64年1月) : 橋爪國安

春山スキー ご案内

今年も例年通り、会員、正月スキー参加者に特別強化合宿
<検定・講習>を下記の通り行ないます。

1. 日程 3月24日(金) ~ 27日(月)
2. 場所 長野県八方尾根黒菱スキー場

< シュプール >

「通信」とは、広辞苑によれば「人の意志を相手に通じること」である。便りを出したり、もらったりすることはなかなかいいものである。この小さな「通信」が、会員の声や思いが気軽に寄り集まってきて「寄せ書き広場」のようになればいいと思っている。

ゲレンデに描かれる1本のシュプールは、言うまでもなく、いろいろな要素が集まってかみ合い、連なり合い、そしてそれらはタイミングという糸のもとに見事に意志の通じ合いを見せながら仕上がっていく。このコラムを「シュプール」としたのも、会員のつながりを大切にしていきたいという思いからである。

創刊号にしては、大変地味なものになったが、これからの期待したい。(H. T)